

# I 研究の概要

## 1. 研究経過

### (1) 前年度までの概要

義務制を迎えた昭和50年代は、子どもの重度・重複化、多様化に対応する個別学習と集団学習についての実践的な研究を進めながら指導の手だてを模索していた時期であった。とりわけ自閉傾向児の激増に伴い、そのかかわり方、指導のあり方についての論議をよび、そのことが研究をおしすすめてきたといえよう。義務制以後、教育課程づくりをおし進める中で、教育目標も「社会適応」から「自己実現」となった。その後、昭和61、62年度にわたり、これまでの10年間の指導の成果をまとめるかたちで、本校創立以来3回目の教育課程の編成を終えた。

昭和63年から平成2年度の3年間、6つのグループによる課題別の研究を下記の内容と方法で行った。

研究主題	発達と障害に応じた指導
研究グループ	3年間にグループの名称が変わったりメンバーの入れ替わりもあった。 ・教科の学習と生活      ・授業の中の「ものづくり」・からだづくり ・コミュニケーション      ・パソコン教材      ・性指導 ・読み聞かせ
研究内容	全校の教師の興味・関心のある課題・分野であって、これまでの部単位の研究では深めにくかった内容から選んだ。
グループ構成	部をこえた3名以上の教師により研究グループをつくる。 グループ所属については一人ひとりの教師の希望を大切にす。

以上のことから研究活動における成果と課題を述べたい。

- 各教師が自分の関心のある課題のグループに入って研究することにより、一人ひとりが研究の主人公としての意識も高まり、自主的に研究会をもち研究活動が日常的に活発となった。
- グループの研究テーマは、いずれも毎日の学習指導に直接関わりの深いものばかりなので、研究活動が日常的に進められた。
- 子ども一人ひとりの能力を最大限に伸ばすための、様々な角度からのアプローチを可能とした。また少人数のグループなので集まりやすく、運営がスムーズにできた。
- グループと父母との合同学習会やケース会がもたれるなど、学校と家庭との連携を取り合いながらの活動を行うことができた。
- しかし、グループの研究は深まったものの、各グループでの研究内容や成果に対

する全校の教師集団への広がりには不十分な点が見られた。

## (2) 今年度の概要

これまでの3年間の研究に区切りをつけ、あらためて研究をスタートさせることにした。

### ① 新しく研究をはじめるとあって職員で確認したこと。

- ・従来の「グループによる研究体制」を継続する。
- ・全教師集団で、現在必要とする研究内容を出し合い、グループの研究テーマとする。更に全体の研究テーマを絞ることにより、グループの研究に方向性をもたせ全教師が共通の課題意識をもって研究を行えるようにする。
- ・前年度の反省に立ち返り、グループ研究会と併せて、研究会を部に設け研究の成果や取り組みが理解され、広く活用され、実践の場に生かされるようにする。
- ・グループ構成メンバーを5名程度とし、各学部から出るよう配慮することにより研究が各学部で生かされるようにする。

### ② 5つの研究グループが成立するまで

子どもを教育する上で欠かせないのが、教師の“やる気”である。この教師の意欲を喚起し、さらに子どもにとって必要な指導内容や方法は何かを模索することにした。その為に全職員が「今、学校として必要な研究は何か？」及び「個人として研究してみたいもの」を、子どもを念頭におきながら話し合った。その結果、従来の研究内容も含めて30程度の内容が挙げられた。各部で特色のあるものが多く出され、話し合いは有意義であった。さらに、部を越えたグループ研究を前提にするため、各部に共通する研究内容から選ぶこととした。研究内容が10に絞られ職員の希望をとることで研究グループが決定された。

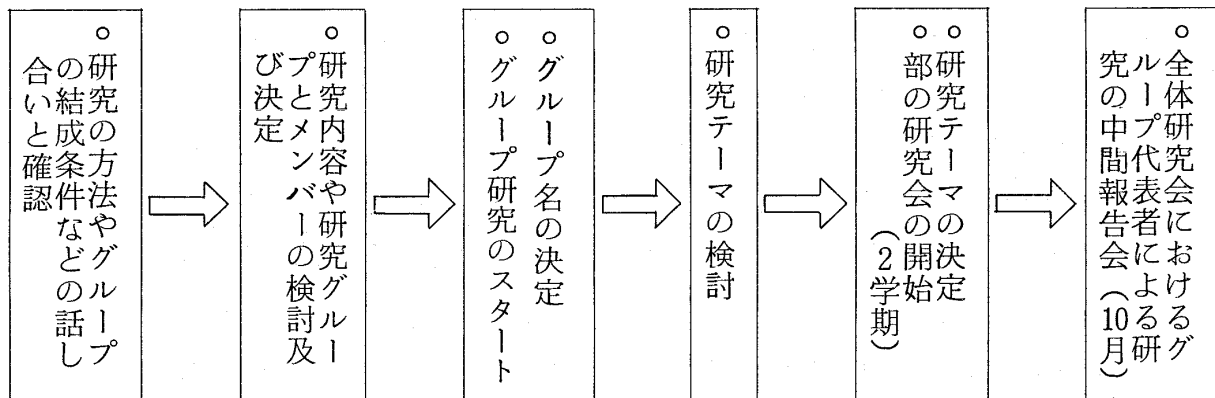
そのグループとは、「授業づくり」「からだづくり」「コミュニケーション」「性の指導」「読みきかせ」の5グループである。結果的には、これまでのグループとはほぼ同じものとなった。これは、これまでの研究を白紙にもどして原点に立ち返り、子どもにとって何が必要なのか、どう指導したらよいのかなどの問題点や研究の課題をふまえての再出発であり、このグループのもつ意味あいは大きいと言わなければならない。

### ③ 研究の進め方

原則として2年の研究を行う。研究の形態として前年度までのグループ研究会と全体研究会、グループ代表者と研究部の打ち合せを行う拡大研究部会に加えて、新しく部研究会を設けた。部研究会は、これまで閉鎖的となり、問題となっていた研究を広め実践に生かす為に必要である。ここでは、一人ひとりの子どもの事例を出しながら、グループでの研究内容や取り組みを、部の中で話し合い共通理解を深め

ながら実践に生かしていくものである。

これまでの研究の流れを順を追って示すと次の通りである。



#### ④ 指導する上で大切にしてきたこと

- 日々の実践を大切にし、それに基づいて研究を進める。
- 実践は一時的ではなく継続して取り組む。
- 子どもにとっての楽しさや成就感を体験させる。
- 子どもの理解を助ける手だてや工夫を行う。

## 2. 研究主題

「発達と障害に応じた指導」のテーマを掲げて4年目となる。これは義務制以後、教育目標が単なる「社会自立」を目ざすものから、全面的な発達をうながし、精一杯生きる力を育てるという「自己実現」へと転換したことによる。テーマはこの教育目標から導き出されたものである。

今年度はあらたにサブテーマ「子どもの気づきを大切にしてい」を設けた。このテーマは過去3ケ年のグループ研究の実践から、統一テーマとして生まれたものである。

「気づき」とは、何かを発見すること、何かを感じることである。全面的な発達をうながし、その子らしく精一杯生きる力を育てるためには、単に知識や技能を“教え込む”ことでは実現できない。子どもが主体的・自主的に活動する中で“ああ、こうすればいいの” “ああ、こういうことか” といった、子ども自身の内面世界の気づきを大切にしなければならない。この気づきの積み重ねが、事物や人への興味・関心を呼びおこし事物や人との豊かなかかわりを生み出すことができるようになる。また、私たちが、子どもの内面世界を少しでも知り、成長をうながす為には、子どもの小さな動きや微妙な表情の変化を見逃さないだけの敏感な感覚が必要である。私たちは、子どもの気づきに目を向ける大切さを感じ、このサブテーマをかかげて研究活動を行ってきた。

## 3. 研究グループの取り組み

5つの研究グループで再出発することとなった。これら5つの研究グループの取り組み

みについて簡潔に述べて概要をしめくくりたい。

### ① 授業づくりを考える

私たちは、教師側からの一方的な働きかけで子どもが動かされるだけの活動ではなく、子どもが自ら手を伸ばし、触り、考え、試行錯誤する授業を目指してきた。

それは単に知識を得たり、ものを作り上げたりすることよりも、むしろ、その知識を得る過程を通じて、子どもの“気づき”を理解しようと考えたからである。

“気づき”とは五感を通じて感じたことを、これまでの知識や経験と結びつけた結果、生まれるものであるといえる。

今年度は算数の中で子どもと『もの』との関わりから、子どもの思考の内面を探っていった。子どもの“気づき”のプロセスを教師も気づき、見つけていくことが「授業づくり」の研究につながるものと考えている。

### ② からだづくりグループ

子どもたちが健康的に生活していくために何をどう指導すればよいか、ということで「遊びを通したからだづくり」「リトミック及びトランポリンの試行」「運動能力に問題を持つ子の指導」といったテーマで研究を進めてきた。

今年度は昨年十分にできなかった心臓疾患等で「運動制限のある子への指導」について研究を進めてきた。まず、基礎的知識である運動生理学を学ぶことから始め、一つの運動がその子に適した強度であるかどうかを知るために継続的に脈拍数を計測し、指導の手だてとした。また養護・訓練の内容として誰でも楽しく運動ができるようにとエアロビクス体操も取り入れた。そしてそれらの実践を通して子どもたちが自分の病気のことや体力の限界があることに気づき、その時の体調に合わせて活動できるようになってほしいと考えてきた。

### ③ コミュニケーションを考える

良きコミュニケーション（相互作用）の成立は、ことばを身につけることのみならず、すべての学習の基礎となる。ところが、私たちはしばしば、子どもの言いたいことがうまく大人に伝わらなかったり、大人の言いたいことが子どもにうまく伝わらなかったりという場面に出合う。このような状況を少しでも改善するため、私たちはこれまでインリアルの理念に基づき実践・研究を行ってきた。

今年度はこれまでしてきたVTR分析を通して、大人の子どもに接する姿勢の見直しや子ども自身のもつ問題を明らかにしていくこと、かかわる際の目標と手だての検討をさらに深めることにした。それに加え、一対一のかかわり場面とともに集団場面におけるコミュニケーションをどのように育てていけばよいかということにも目を向け、コミュニケーション分析の方法やかかわる際の具体的な目標と手だてについて探っていくことにした。

#### ④ 性の指導を考える

これまで研究グループとして性指導に3年間取り組んできた。中心的には教科的なものと日常生活の中で育てるものとの両面が考えられる。いずれにしてもこれらの指導は子どもの実態をよく見つめるところからの出発であった。しかしながら、実際に指導をおしすすめるにあたっては障害の多様性や特質といったことに示されるように指導上の困難が横たわっていたことも事実である。

改めて性指導のグループとして取り組むにあたっては、一人ひとりに即した指導ということに加え“気づき”に視点をあてた指導を試みるとともに、これまでの実践の整理をおこない教育課程の中での位置づけについて検討を加えることにした。また性指導をより広くとらえ効果的におしすすめるという点から家庭との連携、そして、これまで課題として残されていた施設指導員との懇談も実施した。

#### ⑤ 読みきかせを考える

誰でもが一度は読んでもらったことのある絵本。いくつになっても忘れられない絵本。そのような思いを子どもたちに知らせたく、本研究グループが発足した。

1年目は、読み手と聞き手、そして絵本があるだけで、「いつ」・「どこで」「どのように」など、初歩的なところから出発した。それにもまして、読み手である教師が読みきかせに慣れなければならなかった。

2年目は、本校において読みきかせも定着し、読み手である教師たちも子どもたちの前で読むことに慣れてきた。そして、子どもたちの理解しやすい絵本・興味・関心のある絵本についても話された。

本年度は、サブテーマにある“気づき”について、読みきかせの原点に戻り、聞き手（子ども）の気づき、その気づきに気づく読み手（大人）の気づきについて話され、実践も行われてきた。

(諸 江 修)